

50 美し国日本(副題：英国人ジャーナリストの日本国民の覚醒を促す警世の書を読んで！)

平成 29 年 9 月 30 日

山下 輝男

1 はじめに



日本滞在 50 年の知日派ヘンリー・S・ストーク氏の「連合軍戦勝史観の虚妄」「欧米の侵略を日本だけが撃破した」に引き続き、「大東亜戦争は日本が勝った」(ヘンリー・ストークスが語る世界史の中の日本)を一気に読んだ。

常々、小生が気にし、我が国の自虐史観に抱いていた強い違和感をその通りだと明瞭に語ってくれているのが心強い。然も、欧米歴史に通暁・知悉している英国人ジャーナリストが日本人に向けて発信した意義は大である。

2 書籍紹介

章立てを紹介しよう。本書の全体像が理解できるものと思われる。

はじめに

第一章 日本が戦ったのは「太平洋戦争」ではない！

日本は本当に敗戦国だったのか？ 大英帝国を滅ぼしたのは誰か？

大東亜戦争に勝ったのは日本だった！

第二章 「太平洋戦争史観」で洗脳される日本

大東亜戦争の果たした世界史的な偉業

日本が閣議決定した正式な戦争名称を日本のメディアが使えない  
アジアを日本が侵略した？

『人種戦争』が描く大東亜戦争の姿

世界で最初に、人種平等を訴えた日本

有色人種に同胞意識を持っていた日本

『人種戦争』による日本の戦争の大義

中国人は、日本軍を救世主と崇めた

日本軍を手助けし、イギリス人と戦った中国人

全く逆転した人種の立場

日本はアジアの「希望の星」だった

第三章 日本は「和」の国である

第四章 世界に冠たる日本の歴史

第五章 オリエントにあった世界の文明と帝国  
第六章 侵略され侵略するイギリスの歴史  
第七章 アメリカの「マニフェスト・デスティニー」  
第八章 白人キリスト教徒による太平洋侵略  
第九章 マッカーサー親子によるフィリピン侵略  
第十章 大日本帝国と西欧列強の帝国主義の違い  
大日本帝国は侵略ではなく防衛のための帝国だった  
白人帝国ロシア南下の脅威  
三国干渉という白人列強の侵略行為  
日英同盟は何故締結されたか  
日本による人種差別撤廃提案はなぜふみにじられたか  
日英同盟廃止を望むアメリカの思惑  
ワシントン軍縮会議の謀略

第十一章 大日本帝国は「植民地支配」などしていない！  
日本はアジア最後の砦だった  
日本の朝鮮統治は「植民地支配」ではない  
日本の統治についてデタラメを書く韓国の国定教科書  
人種平等の理念に基づいた「皇民化」教育  
朝鮮王族に嫁いだ日本の皇族・李方子女王  
八紘一宇は「世界は一家、人類は皆兄弟」という日本の理想  
大和の国・日本には八百万の神々がいる

第十二章 日本は中国を侵略していない  
国連で「侵略戦争」が定義されたのは「一九七四年十二月」日本の満州への進出は  
侵略ではない  
日露戦争の勝利で満州の權益を獲得した日本  
中国には匪賊が各地に割拠していた  
満州の在留邦人の保護  
五族協和・王道樂土の満州国  
日本の大陸への進出は「パリ不戦条約」を侵していない  
志那事変は日本の侵略戦争ではない

第十三章 アメリカによる先制攻撃の「共同謀議」  
我々はもっと知る必要がある  
中国の航空部隊のパイロットはアメリカの偽装「退役軍人」だった  
戦争を仕掛けたのはアメリカか日本か  
日本軍航空部隊との交戦  
中国で航空ビジネスを仕掛ける  
ルーズベルト大統領が、チャイナロビーに応えた  
共同謀議をしていたのはアメリカだった  
シェノールトの「日本爆撃計画」

武器貸与法を議会に提議したルーズベルト大統領  
アメリカによる対日経済封鎖と輸送船への攻撃  
日米戦争を引き起こした元凶の書

第十四章 大統領がアメリカ国民を欺いた日  
大統領による裏切り行為  
日本に対米戦争を起こさせるための八項目  
挑発目的で巡洋艦の出没  
合衆国艦隊司令長官がルーズベルトに反旗  
暗号解読を活用したマッカラム  
「真珠湾の奇襲」は、アメリカの罠だった！  
泳がされていた帝国のスパイ  
太平洋戦争はアメリカの「侵略戦争」だ

第十五章 大英帝国を滅ぼしたのは日本だった！  
翻訳・構成担当者によるあとがき  
藤田裕行 訳・構成

初版 平成 29 年 4 月 27 日 発行 株式会社ハート出版 定価 本体 1600 円

### 3 特に印象に残った事項等

#### (1) 戦争の勝利＝戦争目的の達成

軍事専門家であった者にとっては自明のことであるが、大東亜戦争についてはこの視点から考えたことはなかった。改めて、大東亜戦争の戦争目的即ち、「自存自衛と東亜新秩序建設」の達成度を見てみると完敗した訳ではない。更に言えば、道義的に、正々堂々と戦ったという意味においては、戦争に勝利したとも云える。何れにしても、アジア覚醒に素晴らしい寄与をしたことは疑いを容れないし、日本軍将兵の敢闘があったからこそ、日本は、戦後世界からの尊敬と信頼を勝ち得たのだ。日本人は自信を持っていい。

氏は、連合国側はルール違反であるとも断じ、その視点からも日本の勝利と判定している。

#### (2) 太平洋戦争と大東亜戦争

まだまだ大東亜戦争との語彙に大半の日本人が違和感を持っているのが現実だ。それ程、戦後のWGIPに毒されているのだろう。太平洋戦争は米国の太平洋における戦いの呼称であり、日本の戦争全体を表し得ないのは当然だ。正式に閣議決定した戦争の名称を使えないのは自虐の何物でもない。

#### (3) アジア諸国覚醒・独立への寄与

日露戦争勝利が、欧米列強に侵略されて塗炭の苦しみにあったアジアの人々に希望と自信を与え、大東亜戦争での日本軍による植民地からの解放は歓喜を齎した。また、具体的な独立援助を行い、多くの国から感謝されている。

- (4) 自らの戦争犯罪には口を閉ざし、日本のみを断罪する愚  
戦争裁判は勝者による敗者の断罪そのものである。勝者の犯罪を殊更に論って、自らの責任を軽減する気はないが、余りにも一方的に過ぎ、勝者の断罪が国民意識に沈殿し、自虐的となり自信喪失に繋がっているのは残念だ。
- (5) 壮大なる謀議を巡らす列強と単細胞(?)な日本  
獲物を仕留めるために種々策を巡らす民族とそのような技を必要としない農耕民族の差異を感じるのは小生のみか。日本民族は謀略は不得手なのだ。  
米国の陰謀説は今なお根強く信じられているし、多くの断片情報がそれを証明している。謀略を見抜く叡智を日本も身に付けるべきなのだろう。
- (6) 人権先進国だった日本  
JPSN 一言言いたい欄に投稿した「実は人権最先進国だった日本 (猶太人対策要綱等)」(<http://www.jpsn.org/opinion/word/10770/>) に書いたとおりである。強い国は誠に勝手なものだ。正義と何ぞや!
- (7) 日本に対する先制攻撃計画の事実  
日本が真珠湾を奇襲する一年前の 1940 年 12 月の時点で、日本爆撃計画が具体的に練られていたとは知らなかった。米国が中国に爆撃機とパイロットを提供して義勇軍を装って、シナ大陸から長崎、神戸、大阪を爆撃せんとするものである。卑怯なる攻撃計画だ。これぞ、彼等の真骨頂。
- (8) 日英同盟の締結と破棄  
日英の戦略的利益が一致し日英同盟が締結され、日本の国益に裨益したが、米国の大戦略にとっては支障があり、同盟廃止を英国に強く働きかけた。どうにもならなかったのだろうかと思いたくなる。
- (9) 欧米列強の植民地支配と日本の対応  
「西洋列強の帝国主義に遅れて参加した日本」との構図で言われるのが常であるが、列強のそれが搾取であるが、日本による統治はそれとは反対である。朝鮮半島然り、台湾や満州もそうだ。実態を見ない浅薄な帝国主義論・歴史観。
- (10) 捏造に踊らされる日本!  
極東裁判で日本の悪行と宣伝された慰安婦問題、南京大虐殺等々その多くは捏造若

しくは誇大表現だ。戦後 70 年にわたって踊ってきた日本であるが、そろそろ真実に気付くべきだろう。

(11) 日中戦争とは何ぞや！

満州事変や志那事変はあっても、日中戦争は歴史上存在していない。そろそろ正式名称を使用すべきなのだろう。また、これら事変の事実解明が十分進んでいないと感じる。明らかにされつつある諸資料を精査し、イデオロギー色のない眼でしっかり真実を解明すべきだ。勿論、日本が国策を誤った部分もあろうが、一方的な日本悪玉論はもうやめて良いのではないか？氏は“日本は中国を侵略していない”と指摘している。

その声に耳を傾けてみるべきだろう。

(12) 韓国について

先日書店で、目を疑うような題名の書籍を発見した。「今こそ、韓国に謝ろう」との衝撃的な書名である。作者は百田尚樹氏であるので、痛快な書であろうと大いに期待している。

(13) 大東亜戦争を高く評価したイギリス人 (271p~273p) から

藤井巖喜氏の書から引用する形で「イギリスのマウントバッテン卿は、東南アジア連合国軍司令官で、当時の日本軍の好敵手でした。マウントバッテン卿は、戦後に東南アジア連合国軍の終戦処理に関する報告書を発表しています。その中で、日本軍の業績として次の三点を評価しています。(中略) マウントバッテン卿は、決して親日的ではなかったと思いますが、それでも日本軍がやった事を極めて客観的に評価しているといえるでしょう。また、ウッドバーン・カービー少将は、・・・インドネシアで日本が行った軍政に対して同じような評価をしています。」

どうだろうか？正当な評価をしてくれている者も居るのだということを理解すべきだろう。

(14) 第十四章は圧巻だ！

第十四章の章名・項目は記述の通りだ。再掲する。

第十四章 大統領がアメリカ国民を欺いた日

- ・大統領による裏切り行為 ・日本に対米戦争を起こさせるための八項目
- ・挑発目的で巡洋艦の出没 ・合衆国艦隊司令長官がルーズベルトに反旗
- ・暗号解読を活用したマッカラム ・「真珠湾の奇襲」は、アメリカの罠だった！
- ・泳がされていた帝国のスパイ ・太平洋戦争はアメリカの「侵略戦争」だ

今更、同盟国アメリカを非難・貶める積りは毛頭ないが、事實は押さえておくべきだろう。それを理解した上での日米同盟でなければならない。

#### (15) 美しき・素晴らしい国日本の再確認

歴史上数多の王朝・国家が栄枯盛衰を繰り返してきた。その中で、日本だけは、万世一系の天皇を奉じ、大東亜戦争後の一時期を除いて、外国の占領の憂き目には合わなかった稀有な国家だ。

世界史を俯瞰的に見るとそうなるのだ。その事は余りにも当たり前すぎて、その良さ・素晴らしさを日本人が余り認識していないようだ。その事を再確認させて呉れる書だ。

#### 4 終りに

東京裁判史観の自虐性が指摘されて久しいが、未だに国民の多くの胸中にはその史観が澱のように堆積し、マスコミや教育現場では相変わらず、その史観が跋扈している。戦後七十年を過ぎた今日、美しき日本に目を向けるべきではなかろうか？その為の好個の書である。

(了)